

# 第8回「女性研究者のリーダーシップ」 研究会のお誘い

この研究会は、愛知大学研究助成金による研究プロジェクト「女性研究者のリーダーシップ研究」の活動の一環として行われるものです。公開研究会ですので、研究会への参加は大いに歓迎いたします。興味のある方はどうぞ遠慮なくお越し下さい。

テーマ：

## ジェンダー・アイデンティティ Nature vs. Nurture

と き：2007年8月25日(土) 午後1:30～午後5:00

ところ：ルイ・パストゥール医学研究センター

3階セミナー室

### 講演

① 東優子氏 (大阪府立大学)

タイトル 「ジェンダー・アイデンティティ：

Nature vs. Nurture 論争を読み解く」

② 宇野賀津子氏 (ルイ・パストゥール医学研究センター)

タイトル 「ヒトの性分化」

愛知大学共同研究助成金「女性研究者のリーダーシップ」(代表 坂東昌子)主催

ルイ・パストゥール医学研究センター 共催

女性研究者の会：京都 協賛

性差という難しい問題を語る時、政治的に利用されることを警戒して科学的事実を目をそむけたり、その事実を不都合なことと短絡的に判断して最新の科学的事実を受け入れようとしなかったり、また部分的事実を誇張して差別を誇張することに利用したりする傾向がしばしば認められます。演者の一人、宇野(企画委員)は、1976年にパリで開催されたシンポジウムの記録「女性とは何か?」の翻訳に関わりました。その頃、女性学の間では性差を語ることは差別を助長することになると警戒され、科学的事実を目をつぶって議論する傾向が認められたものです。

このシンポジウムの企画者であるE.シュルロとJ.モノーは、何よりもまず事実を直視し、変化を受け止める方針、最新の科学情報を専門家自身が一般読者にわかる言葉で語る方針、科学を歴史の視野のなかにおき、性を男女両性にとって大切な問題として考えるといった方針でシンポジウムを企画しました。当時、記者等はこの姿勢に感激したものです。

今回の研究会は、性差を語ることが男女共同参画と相反するのかどうかを検証するためにも、その後30年の性差の科学の進歩について、考える機会を持つことを目的に企画しました。

宇野は、ヒトの性分化を遺伝子の性、性線の性、内性器の性、外性器の性、心の性と5つの段階に分けて概説し、現在の性差に関する科学研究の状況について紹介します。また併せて女性のライフサイクルの変化にも言及し、科学の発展が女性の性役割をどのように変えたかを、紹介する予定です。

東は、インターセックスやトランスセクシュアリズムなど、医療的介入の理論的支柱となってきただけでなく、人間の性(別)の決定要因とは何かをめぐる政治的な議論にも影響を与えてきた、ジェンダー・アイデンティティをめぐる性科学研究について、論点整理を行う予定です。具体的には、J.マナーとM.ダイヤモンドという二人の性科学者の理論を取り上げ、その違いとそれぞれの影響について解説します。

この研究会では、性差についてまず「何がどこまでわかっているのか」に目をむけてみようと考えます。

